シンガポール・教育研修　研修報告書

教育学科　１年

◎研修に参加した目的

私は高校１年次、語学研修でニュージーランドへ行かせていただいた。文化の違いを体感したことがきっかけで、他の国へ行き文化の違いや教育方法について知りたいと思うようになった。この大学に入学し、海外の教育方法について知る機会はないかと探していたところ、この研修を知った。説明会に参加しシンガポールは高水準の教育と学力を誇っているということや、インターナショナルスクールがあり様々な国の教育方法が凝縮されているということをお聞きし、さらにこの研修に参加したいと思い参加を決めた。

私が研修に参加し達成したい目的は２つある。

１つ目は、シンガポールの教育方法を知ることである。シンガポールの TOEFL の結果を見るとリーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの合計点がアジアにおいて最高スコアであり、IBDP という英語以外のテストでも平均点を大きく上回る点数となっている。これらのことから、教育力が高水準であることの要因は何かということについて気になり、シンガポールの教育方法を知りたいと思った。

２つ目は、日本で重要な問題になっているいじめや不登校の問題を解決するヒントを見つけることである。シンガポールでは多様性教育（コミュニケーション能力が高まり、自他を尊重し人権意識が高まる教育）が行われている。日本は海外の国と比較し自己肯定感が低い傾向にあると言われているため、シンガポールでは多様性をどのように活かしているのかを見聞きし、子どもたちの自己肯定感を育むヒントを見つけたいと思った。

この２つの目的を達成するため、シンガポール・教育研修に参加させていただいた。

～Marymount Convent School（小学校）～

○この学校の特徴

私たちが最初に訪れた学校、メアリーマウント・コンヴェント・スクールは様々な国の子どもたちを積極的に受け入れている私立の小学校である。この学校の教育方針は①礼儀正しく教養を身に着け、女性らしさを育む②人の前で正しいことは正しいと言える（人の為になることを言える）人を育む③この学校を卒業しても自分から学び続けられるような知的好奇心を持っている子を育むという教育方針である。そのため、新入生が来るときの児童の歓迎の言葉で共通しているのは、①仲が良い友達がいる②優しい先生がいるという言葉である。歓迎のビデオでの児童の表情も優しく、新入生もすぐに打ち解けられるような雰囲気を感じた。

教育問題で１番問題視されているのは、6 年生でその後の進路を決める PSLE という

テストがあり、そのテストが児童の負担になっているのではないか、本当に児童のためになるものなのかということであった。そのため、学校で出される宿題の量は英語、数学、理科、第２ヶ国語などの１つの科目に対して 10 分から 15 分と少ない印象を持った（あまり多くの宿題を出してはいけないというきまりがあるそうだ)。しかし、高学年になるとテストのために夜遅くまで塾に通う児童の割合が６割強と多く、１人１人の勉強に対する意識が高いように感じた。

いじめや不登校は問題視されていないのかという質問に対して、いじめが少しはあるけれど学校の先生と保護者との連携が強くすぐに報告できる環境にあるため深刻ないじめになることを防ぐことが出来るとお聞きした。シンガポールにはＣＣＥ[i]やＣＣＡ[ii]、ＦＴＧＰ[iii]という教育制度がある。これらの制度により教師と児童との信頼関係もできやすく、児童が相談しやすく教師も児童の些細な変化に気づくことが出来るのではないかと考えた。

〇施設見学

日本の学校と大きく違うところは、廊下などは壁で覆われていないため、自然の中にある学校というような印象を受けたことだ。教室から一歩外に出ると新鮮な空気で満たされ、そこにいるだけでリフレッシュできるように感じた。

・体育館

校内にはいくつもの運動できる場所があった。施設は、体育館、ダンススタジオなどがあり、多くの部屋に分かれていた。体育館の中には、平均台や鉄棒、トランポリン、スポンジプールがあり、天井も高く空間が広いため児童がのびのびと体を動かすことができる場であると感じた。

・職員室

職員室で驚いたのは教師１人１人の机とスペースの広さであった。Ｌ字型になっており、顔の高さで仕切られているため、個人の空間が守られているように感じた。

・理科の実験用の植物ハウス

このビニールハウスには、理科の実験用のチンゲン菜が栽培されていた。植物が良く育つように下にあるタンクに液体の肥料を入れて管理しており、費用がおよそ 60 万円かかるそうだ。

・図書館

図書館には、プロジェクターや視聴覚室、勉強スペース、本を読むスペースがあった。椅子は場所を取らないように工夫された造りのように感じた。本は、中国語、マレー語、英語などの言語で書かれた本があり、「窓際のトットちゃん」という日本の本が有名で英訳されたものが置かれていた。

・授業

５年生の授業の様子を実際に見せていただいた。社会科の授業で、前時の学びでは班ごとに教科書に載っている文明についてプレゼンするという課題が出ていたそうだ。児童がみんな前の方にいすを並べ、プレゼン発表を聞き、クイズが出された時には「１，２，３」で児童が一斉に手をまっすぐ挙げていてあまりの迫力に驚いた。ある班の発表は、象形文字について調べ、劇を交えたプレゼンの形式であり、クイズに答え正解した児童におやつのプレゼントがあった。児童が授業をより楽しめるようにと考え、自分たちでプレゼントを用意したそうだ。自ら考え授業をより楽しくしようと工夫しており、自分たちで授業を作り学ぶという主体性が見られ、おやつを用意するという発想は日本だとなかなかない発想なため新鮮に感じた。現地の小学校の先生が「できるという自信がある人いますか？」というように児童に問いかけており、児童に対しての問いかけ方にも違いがあるということを知った。

〇文化交流（Marymount Convent School）

文化交流では児童に折り紙の作り方を教えた。日本の四季について紹介し、それになぞらえて折り紙で四季を表現することを伝えた。春はチューリップ、夏は法被、秋はきのこ、冬はだるまを作る予定であった。折り紙は日本の文化であるため、折り紙をするのが初めてである児童も多かった。そのため、英語を用いて折り方を説明するのが難しく感じた。私は４人の児童に折り紙を教えた。初めに１番簡単なチューリップを教えた。児童は「これでいいの？」と迷いながらも丁寧に折り完成させていた。１番教えるのに苦労したのは、きのこである。「このように折ります」と実際に見せながら教えていたが、私の英語力不足で子どもたちには伝わらなかった。担任の先生が来てくださり、言葉を添えることによって子どもたちに伝わった。時間が足りなくてだるまは作れなかった。これらのことから、英語で折り方を説明する事前準備をもう少し行うべきであったと感じた。少人数指導で、出来ている児童は自然に困っている児童に教えており、日本と比べより積極的に児童同士で学び合っている様子が見られた。ある児童は教えてもらう際に全部自分で折りたかったようで、（折ってもらうのではなく）折り方を教えてほしいと自分の気持ちを伝えることが出来ていた。これらの体験から、分かりやすく伝え

ると、少ない時間でより多くのことを教えることができ、児童の学びがより深くなるということを実感した。私が実際に授業する際や子どもたちと接する際には分かりやすく伝えることを心掛け、児童の学びがより深いものになるよう児童の学びを支えたい。

～INVICTUS INTERNATIONAL SCHOOL(インターナショナル校)～

〇この学校の特徴

この学校はおよそ 90 か国に 1800 の学校があり、国際的なカリキュラム[iv]を適用している。インターナショナル校のカリキュラムはシンガポールの教育制度とは異なっており、1 番驚いたことは、このインターナショナル校に通う児童は小学 6 年生で受ける PSLE のテストは受けないということだ。シンガポールは教育に力を注いでおり政策としているのに、教育制度に全く影響を受けていないということに驚いた。

授業の流れは、午前中に頭を使う「英語」と「数学」を学び、午後は理科や社会を学び、15：00～16：00 は日本でいう部活をする時間であった。効率よく学ぶために時間割が工夫されていることは児童の学びの質を高めるために大切なのではないかと思った。休み時間には温かい食事が提供され、食育も行われていた。

この学校ではいじめや不登校はそれほど問題になっていなかった。教師は、児童がどんなことに興味を持っているのか、児童の自己実現ができているかということを大事にしているそうだ。児童と接する際には、１人１人の差をよく見てその児童に適した支援をするということが大切であると述べていた。

〇授業見学

低学年の授業を見させていただいた。児童はチョコレートやポテトチップスを食べ、どのような味がしたかを表現する方法で学んでいた。初日に訪問したメアリーマウント・コンヴェント・スクールと比較してもほとんど異なる様子であった。初日に訪問した学校は、机の配置は日本と同じで全員前を向いて授業を受ける配置であったが、この学校はテーブルが４つほどあり、児童同士が向かい合い座る配置であった。説明を聞くときは前のスペースに集まって座り、教師の話を聞くというように指示を受けるときと作業するときで分かれていた。1 クラスに 20 人ほどおり、初日に訪問した学校と比べると児童の数は少なかった。共通していることといえば、プロジェクターを用いたガラス黒板であったことや森の中の学校のように豊かな自然に恵まれている環境であった。

～St. James` Church Kindergarten Harding campus(幼稚園)～

〇この園の特徴

聖ヤコブ教会幼稚園は①１人１人に質の高い教育②優しさ・協調性などの道徳心と主体性を育むという教育理念を掲げている幼稚園である。シンガポールの幼稚園の中では敷地がとても広く通う幼児の数も 850 人と多かった。教育時間は 1 人 3 時間と決まって

おり、午前と午後に分かれていた。

多くの研修生を受け入れており、私たちが訪問した際も幼稚園教諭として大切なことを教えてくださった。その中で印象に残っていることは、美しいものを見て、美しさを学ぶということだ。教師自身が美しさを知り、その感覚を幼児にも見聞きしながら伝えていくためには、自ら体験し感性を磨いていくことが大切だと感じた。また、人とのかかわりの中で感性が磨かれていくため、答えが１つではないような質問を投げかけ、目には見えないことを学び、内面を磨いていくことも大切であると感じた。

○施設見学

園庭を通りもう１つの施設に向かうと、広い遊び場やプール、教室などがあった。広い遊び場には遊具が様々な種類の遊具が置かれていた。また、廊下にもテーマに沿って様々なものが置かれているため、多くの刺激を受け、興味関心も広がりやすく、遊びながら自然と学べるのではないかと考えた。

教室では、子どもたちが中国語で歌を歌っていた。幼稚園から中国語と英語のバイリンガル教育であり、英語は公用語であるが、第２ヶ国語の中国語は幼児の興味関心が重要になってくるため、子どもたちの興味関心を引き出すために、歌などの楽しめる活動の時間は中国語の先生に教わるという工夫がなされていた。また、幼児の必要性に応じてプールや語学などの活動を変えているそうだ。これらのことは、技術面の得意なところをより伸ばせる教育であるため、１人１人の可能性を最大限に引き出せるのではないかと思った。

5～6 歳の幼児の教室では、小学校に入るための前準備の活動が行われていた。「小学校と幼稚園で違うことは何か？」など、幼児に考えさせる活動があるため、より目的を持ち小学校へ通うことが出来ると考えた。

～Little　Skool　House Outrun campus（幼稚園、保育園）～

○この園の特徴

2 歳 18 か月～6 歳の幼児が通う保育園・幼稚園である。2 歳 18 か月～3 歳までは、「Relationships　Based　Curriculum」という幼児と教師の絆を育むカリキュラムがある。このとき、幼児自身がやりたいやり方を尊重し、観察をして興味関心が変わったらテーマを変えて指導するそうだ。「Literacy Based　Project」という 4～6 歳の幼児が受ける教育は、読解力を身に着け、子どもたちが知りたい事を取り上げ、10 週間のプロジェクトの中で新たな発見をまとめるものである。読解力を身に着けるよみものも何を読むか決まっているわけではなく、その子の興味関心があるものを選ぶそうだ。2 歳 18 か月の幼児の１つのレッスンは 30 分、4 歳の１つのレッスンは１時間であり、その

時間もすべてその子の関心の高いものを使い学ぶことが出来るようにしているそうだ。

〇教室見学

年少、年中、年長のそれぞれの教室を見せていただいた。

年少の教室では、お昼寝の時間だったため、幼児が自分たちで布団を敷いていた。そこの教室で見たものは、多くのクリップや水を吸い上げるスポイトなどであった。私たちが訪問したときのテーマが「つかむ手の力をつけること」だったため、それらの中から自分の好きなものを用いて遊びながら身に着けていくそうだ。

年中の教室では、自然のもの（色、葉、本など）を教室内にも取り入れるような工夫がなされていた。教室内にいながらも自然に触れることが出来る環境は子どもたちの心を豊かにするのではないかと考えた。

年長の教室では算数、理科などのコンセプトごとに分かれた配置で幼児の作品が飾られていた。水はどこからくるのかという自然の仕組みや宇宙のことについて興味を持ち、子どもたち自身が調べた作品であった。「宇宙や自然の仕組みなど学校で学ぶ内容に小さいうちから関心を示すのはなぜか？」と質問があり、毎日新聞を 5 分から 10 分読んでいるため、身の回りで起きていることに関心が高く、そこから疑問が生じるという回答であった。そのため、「先生が子どもたちと接する際に心がけていることは？」という質問に対して、子どもたちが持った疑問を解決できるように情報提供することを心がけているという回答をいただいた。

また、教室内の掲示に幼児が書いた中国語の文字があり、それは何歳ごろから習い始めるのかと質問したところ、勉強するということは無く、子どもたちが自然と興味関心を持ち遊びのように書き始めると教わった。先生の話から、子どもたちの興味関心の幅がとても広いと感じたが、それは違う国の人が住んでいる環境が身近にあるからこそ生まれることなのではないかと考えた。何気ない環境の中でも子どもたちは多くのことを学び、感じているため、幼少期の環境を整えることはとても大切なことであると思った。

◎研修に参加し、得られた成果

私の研修に参加した目的は 100％達成されたと思う。今回この研修に参加させていただき得られた成果は主に 2 つある。

1 つ目は、シンガポールの教育水準が高いことの要因の一部が分かったことである。今回訪問した教育現場を視察し、共通していると感じたところは、①興味関心から学ぶことを大切にしており、子どもたち自身が主体的に学び、疑問が湧き出てくること②より効率的な時間に学ぶこと（思考の動きが活発な午前中の時間に英語・数学を学ぶ、歌などの楽しい活動の際に中国語を学ぶなど）③勉強しやすい環境（プロジェクターを用

いた見やすい文字、暑すぎない室内温度など）である。これは、シンガポールの教育水準が高いことの要因の一部に過ぎないと考えるが、実際に見たことで視野が広がるように感じた。

２つ目は、いじめ、不登校などの解決策や自己肯定感を育むヒントを見つけることができたことである。いじめ、不登校はあまり教育的な問題にはなっていないことの要因として、多様性教育だけではないと考える。①学校が 13：30 に終わり、保護者と教師の連携する時間が確保されていること②自分の好きなことに取り組み自分を見つめる時間が多く取られていることにより、自己認知を促進すること③児童と教師の関係を築きやすくするプログラムがあることなどにより、深刻ないじめや不登校などの問題を未然に防ぐことができるのではないかと考えた。

今回この研修に参加させていただき得られた成果を通して、興味関心が湧き出るような授業を目指すことや児童が相談しやすいような信頼関係を築くことを念頭に置き、教育活動に活かしていきたい。

最後に、この研修に参加するにあたりお世話になった先生方や先輩方に感謝しています。１人では決してできない体験であったことを心に刻み、これからも勉学に励んでいきたいと思います。ありがとうございました。

---

[i]ＣＣＥ（Character Citizenship Education）：多様性の価値観を知ることにより、児童のリーダーシップや自立心が育まれる制度

[ii]ＣＣＡ（Co-curricular Activity）：音楽や美術などの好きな活動を選び１年生から取り組む教育制度

[iii]ＦＴＧＰ（From Teacher Guidance Period）：１週間に１回設けられる教師と児童の積極的な関係づくりの時間

[iv] IPC 初等カリキュラム：教科は無く、テーマの中で様々なことを学ぶカリキュラム